

令和7年度

鹿児島県教育

11月号

巻頭言



多様性と協働性が紡ぐ

シマの教育に魅せられて

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県立武岡台特別支援学校校長
一瀬 校長 萩之内 靖

萩之内 靖

二十一世紀の幕開けとなった平成十三年、
新年度の始まりとともに、私は奄美大島の名
瀬市立名瀬小学校に赴任した。

色鮮やかな亜熱帯の自然、気さくな職場や
子供たち、そして、地域住民の温かな人柄は、
妻や我が子らをも魅了し、今なお忘れがたい
五年間の思い出として心に残っている。

初めての音楽専科に戸惑いながらも、学生
時代に親しんだ吹奏楽やマーチングの経験を
子供たちに伝えたいと願い、日々の教材研究
に力を注いだ。また、当時の校長の勧めで
三味線を購入し、島唄や奄美新民謡にも関心
を広げ、授業や吹奏楽の指導に活用していっ
た。折しも元ちとせさんの「ワダツミの木」
が大ヒットし、島唄文化が再び脚光を浴びた
時期である。私は地元で活躍する唄者のライ
ブに出向き、指笛や締太鼓のコツを学ぶ機会
にも恵まれた。

平成十五年は奄美群島日本復帰五十周年の
節目にあたり、島全体が活気に満ちていた。
その中で名瀬小吹奏楽部の最大の舞台は、県
民体育大会総合開会式での式典演奏とマーチ
ング発表であった。鹿児島県警音楽隊の講師
をはじめ、市教育委員会やPTA、地域の大き
な支えを受け、感受性豊かな奄美の子供たち
は互いに励まし合い、学び合いながら一丸

となつて成長していった。

迎えた本番、六十四人の子供たちは、演奏
とドリルフォーメーションに加え、八月踊り
やフラッグパフォーマンスを通して奄美の歴
史と文化を見事に表現した。その光景は、今
も私の心に深く刻まれた大切な財産の一つで
ある。

さて、特別支援教育の実践において私が常
に意識してきたのは、「多様性」と「協働性」
を尊重する姿勢である。子供たちの個性や特
性は、異なる楽器が響き合つて音楽をつくり
出すように、多彩で豊かな調和を生み出す力
を秘めている。奄美の島唄もまた、集落ごと
の風土や生活の息遣いを映し出し、様々な声
色を重ねて、独自のハーモニーを築いてきた。

鹿児島県の教職員としての醍醐味は、南北
六百キロメートルに及ぶ多様な自然と文化に
触れ、多くの子供たちや保護者、地域の人々
と関わる中で新たな自分を発見し、人生をよ
り豊かなものにできることではないだろうか。

こうした貴重な価値や経験を、次世代の教
職員と協働しながら、丁寧に伝えていくこと
こそ、今の私に与えられた使命であると感じ
ている。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	16
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和7(2025)年 11月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



随想



方言のすばらしさを 子どもたちに伝えたい!!

鹿児島方言文化協会

会長

種子田 たねだ

幸 ゆきひろ 廣

「ふるさと」の 訛なつかし 停車場の

人ごみの中に そを聴きにゆく」
石川啄木の代表歌です。作者は自分のふるさとを思い出し、ふるさとの方言を聴きたくて、いたたまれなくなり、ふるさとの人が多く集まる駅の人ごみの中に出掛けたのでしょう。方言を聴くことで落ち込んでいる自分を取り戻そうとしていたのでしょうか。方言には人の心を和らげ、元気をくれる働きがあるようです。

鹿児島にも声をかけられると心を和らげられ元気をもらえる方言があります。それは鹿児島県民が何気なく使う「おやつとさあ」という挨拶です。「おやつとさあ」は相手を思いやる優しい鹿児島弁です。「ご苦労様」「お疲れ様」という意味です。この挨拶には「がんばって!」という気持ちが含まれているように思います。そのため物事が終わって疲れた人に使うだけではなく、物事を始めようとする人や旅に出ようとする人などにも使います。その意味を「お疲れ様」だけだと思ってしまうと、聞き手の相手は「えっ!まだ仕事前だから疲れてないのに!」と思ってしまう…。面白い勘違いエピソードの

ある鹿児島弁の挨拶です。「おやつとさあ」は「やつと(とうとう、ついに)」の前に、敬意を表す「御」がつき、その後に「様(さあ)」までついた鹿児島弁では相手を思う最上級の挨拶ではないでしょうか。子どもたちにも是非、使ってほしい鹿児島弁の挨拶です。

鹿児島の方言「鹿児島弁」は「日本一難解な方言」と言われます。だからでしょうか、鹿児島では特に方言離れが進んでいるように思われます。知人から「大分から福岡に転勤したら子どもが福岡弁になった。次に長崎に転勤したら子どもが長崎弁になった。昨年、鹿児島に転勤したので子どもも鹿児島弁になると思っていたら、共通語になった。」と聞かされて、とてもショックを受けたことがあります。それがまさに鹿児島の方言伝承の現状です。方言は一回消滅すると二度と再生は難しいと言われています。

方言は「地域の言葉の文化」です。私たちは鹿児島弁を消滅させてはならないと、二〇一〇年に鹿児島弁劇団を設立し「鹿児島弁劇」を通して鹿児島弁を伝える活動をしています。鹿児

歴 略

一九八八年、ハワイでウェディング会社を設立。その頃英語に取って代わられたハワイ語復興プログラムに参加。その成功事例を参考に、鹿児島弁の復興を計画。二〇一〇年、「鹿児島弁劇団」を設立し、鹿児島弁の継承活動をスタート。

鳥県と鹿児島市の協力を得て、県内の小中学校を年間三〇校程度訪問し、鹿児島弁劇団の出前授業を実施しています。内容は小学生向けに鹿児島弁のユーモアいっぱい劇「鹿児島弁食堂」と、中学生向けにはコミカルな鹿児島弁博士が登場して鹿児島弁の文法を楽しく解説する「鹿児島弁図書館」などです。子どもたちからは「初めて鹿児島弁を習った」「鹿児島弁は楽しい」「鹿児島弁はほっこりする」「鹿児島弁を使ってみたい」など評価を得ています。この鹿児島弁出前授業が縁で子どもたち八名と鹿児島弁劇団二五名とで鹿児島弁演劇「少年ゴンザ物語」を創作し、多くの方々に見ていただく準備もしています。他に「かごしま弁マンガ・イラストコンテスト」や「こども鹿児島弁検定」「かごしま弁校内放送」など、いろいろなアイデアを出して鹿児島弁の伝承活動をしています。

子どもたちには、鹿児島弁は長い歴史がある大切な言葉の文化であることを伝え、鹿児島弁を次の世代に継承していく我々の活動を見てもいいながら、身近なものにしてほしいと願っています。



本質を踏まえた教育DXの推進を

寿小(隅) 中津 朋 広

一 はじめに

久しぶりに学校現場に戻ると、様々な場面でICTが活用されていることに改めて感心する。日程や連絡事項は校務支援ソフトで共有され、連絡会は週一回に厳選。会議や研修の資料は基本ペーパーレス。学校だよりや各種連絡文書は保護者に一斉メールで配信される。

学習指導でも、教科書や教材の大型モニターでの提示、調べる活動や思考を整理する活動、学習の成果や振り返り等の集約など多岐にわたって活用されている。さらに、子供たちの心の状態の把握にも一人一台タブレットが使われるようになった。

教育現場におけるDXは、予測不能とも言われる変化の激しい社会情勢や持続可能な社会形成など、時代の要請に応える形で進められてきた。急速に進んだその背景には、コロナ禍でも学びを止めない努力と教職員の働き方改革の推進があった。一定の成果も見られる教育DXだが、様々な課題も生まれてきている。

二 本質に迫る議論を

先日、ある教育関係者から「最近の研究公開では、授業研究での話題はタブレットなどのICT活用が中心で、教科指導の本質に関

わる議論が少なくなった。」という話を聞き、共感した。

一人一台タブレットを文房具のように使いこなすことは、これからの時代を生き抜く子供たちに必要不可欠な「生きる力」の一つであろう。しかし、それは方法論だということ忘れてはならない。教科指導の本質が議論の中心にあり、ICT活用の有効性が視点として加わるのであれば理解できる。

わたしは、特にフレッシュ研修の授業研究では、学習指導要領に立ち戻って教材研究をするべきであることを必ず指導している。深い教材研究を行い、黒板とチョークと教師の問い掛けで子供を学びの世界に引き込んでこそそのICT活用なのではないか。

三 「アナログ」も大切に

紙の教科書を読む、鉛筆でノートに書く、おはじや数え棒、色板や積み木などを操作する、といったアナログな学習方法の大切さを見直す必要はないだろうか。例えば、キーボードやタッチペンでの文字入力ではなく、鉛筆を正しく持ち、適切な筆圧で、マスや行に文字が収まるように書く、といった学習活動を計画的に位置付けたい。

四 対話すること・向き合うこと

新井紀子氏は、著書「AIに負けない子どもを育てる」の中で、「リアルタイムに情報を共有できるスマートフォン

の普及によって、(中略)何かを説明しなければならぬ、という機会が激減した。」と述べている。子供同士が考えを筋道立てて説明したり、意見交換をしたりする対話活動を更に充実させたい。

また、冒頭で子供たちの心の状態を把握するアプリのことを述べたが、肝心なのは、教師がMomの基本姿勢で悩みを抱えている子供と向き合うことであるし、もっと大切なのは、アプリでも意思表示できない子供の変化を表情や言動などから推察する教師のプロとしての眼差しなのではないか。

五 生成AIについての理解と活用

生成AIに、例えば、『○○○』の読書感想文を、小学校○年生が書く想定して、○○○字程度で例文を示して。」と入力すると、驚くほどのスピードで感想文が生成される。本当に子供が書いたのか、生成AIの力を借りたのかを見抜くのは至難の業であろう。ICT活用を推し進める上では、そういった課題とも向き合わねばならない。一方で、わたしたち教職員が、定型の文書を作成したり、会議資料の体裁を整えたりする場合は、生成AIは大いに活用されるべきである。

六 おわりに

本原稿を構想している間に、折しも中央教育審議会の答申に、デジタル教科書を正式な教科書として位置付けることや、情報活用能力を育成するカリキュラムを体系的に整備することが盛り込まれると報道された。教育DXが更に進展する中で、子供たちの生きる力を育むために、本来真ん中にあるべき本質的なものを大切にしたい。取捨選択・創意工夫を今後も続けたい。



全ての子供が輝く学校へ 特別支援教育の理念を教育の原点に据えて

指宿特支 眞下 千代子

一 はじめに

「Society 5.0」の時代を迎え、デジタル化・AI化が進む中で、社会の価値観は大きく変化している。少し前の時代：学校教育制度が整った明治初期から近代にかけて社会はもっとシンプルで、社会の目指す方向と学校教育の価値観は一体であり、人々の幸せの形も明確であった。子供が、学校に通い卒業し社会人となり自然に自立していくことができた時代である。しかし、時代の流れと共に社会の価値観は多様化し、核家族化の進行や地域社会の希薄化など複雑な背景が生まれ、子供の安心できる居場所が曖昧になり、その結果「不登校」などの様々な問題が拡大し、深刻化している。

また、世界的に人権意識が高まり、多様性を尊重する理念が広がり、日本でも平成二十八年に「障害者差別解消法」が施行された。文部科学省は障害の有無に関わらず多様な子供たちが共に学ぶ「インクルーシブ教育」を推し進めている。

二 特別支援教育の重要性

社会は、その時代の変化に応じて形成され、それに伴い人々の価値観も変化してきた。そ

れは当たり前のことであり、そうして社会は進化してきた。しかし、科学が発達し豊かになる一方で、社会には歪みのようなものが生じていることは否めない。

情報社会の時代に生きる現代の子供たちは「情報収集能力に優れ操作能力が高く」「デジタル社会で柔軟性・共感性をもって生きる力」を持つという長所がある反面、「対人関係づくりの未熟さ」や「自己肯定感の低さ」という課題を抱えている。不登校の子供たちだけでなく多くの子供が「安心できる自分の居場所を求めて」いることは、多くの専門家が指摘している。

私は長年特別支援学校に勤めてきたが、特別支援教育は障害のある子供だけのものではないと考えている。教育の本質は「一人一人のかけがえのない存在を尊重し、その人らしく生きる力を育てること」である。特別支援教育では一人一人の学び方やつまずきに寄り添い、最も適した方法を探ろうとする姿勢がある。

しかし、現実には「特別支援教育＝特別な子供の教育」と捉えられがちである。だが、定型発達の子であっても得意・不得意があり、

理解の仕方も異なる。「個別最適な支援」「多様性の尊重」「共感的理解」の視点は、全ての教育に共通して求められるものだと思う。

また、特別支援教育の現場では、子供の見立て（実態把握）をどれだけ正確にできるかが鍵となる。発達の特性を理解し、言葉や行動の背景にある思いを汲み取り意味を探ろうとする姿勢が大切となる。アセスメントや支援計画、チームアプローチの考え方は、子供の心に届く生徒指導へとつながり、全ての教育の基礎となるのではないか。

知人の話によると、インクルーシブ教育の発祥の地であるデンマークでは、障害のある子供が、自らの障害を「個性」として捉え、強みとしているという。通常の子供に「君には何があるんだ？」と問い掛けると、問われた子供が「自分に強み（障害）がない」と落ち込む場面もあるそうだ。

三 おわりに

精神科医の中井久夫氏は「学校は、人と共に過ごし違いを調整しながら生きることが学ぶ場所」と言っている。互いの違いを認め、支え合い学び合う共同体を築くことができれば、子供たちは他者を尊重し、社会に貢献できる大人へと成長するだろう。

社会の価値観が多様化し、「幸せの在り方」も人それぞれである今こそ「特別支援教育の視点で子供たちを見ること」が、全ての子供に希望を届ける一歩だと思う。

子供たちが、自分の可能性を信じ「生まれてきて良かった。自分は自分でいい。」と心から思える社会を作るために…。今こそ特別支援教育の理念が教育の原点となることを願い、ここに提言いたします。



今日の学びを大切に、 明日の学びが楽しみになる星峯西小

星峯西小(市) 永里 智 広

一 はじめに

本校は、緑豊かな星ヶ峯ニュータウンに位置している。静かで落ち着いた教育環境に恵まれた、創立四十五周年を迎える学校である。児童は素直で明るく、前向きに努力する姿が輝いている。保護者の教育への関心も高く、学校運営協議会や地域コミュニティが連携し、子供たちの健やかな成長を温かく力強く支えている。

二 学校経営方針

本校では、「利他の心」を理念に掲げ、同じ方向性のもとで取組の一体化を図っている。目指すのは、自ら考え行動する力を持ち、他者への責任感を育み、自分らしさを大切にする自律型人材の育成である。学校を「小さな社会」と捉え、自他の教育的な関わり、すなわち仲間と共に汗をかく活動を重視し、共に成長する喜びを実感しながら、児童一人一人のウェルビーイングの実現を目指している。教育活動は、次の五つのコンセプトを柱に展開している。

- 自己肯定感を育む学びの充実
- ・ 自力解決、自己選択・決定の保障
- ・ 失敗から挑戦に向かう活動の充実

二 仲間と汗をかき、共に成長する学びの充実

実

- ・ 「利他の心」を踏まえた目標設定
- ・ 「道徳的自己」「自己内対話力」の向上
- ・ デジタルとリアルのベストミックス

三 探究的な学習での効果的な活用

- ・ スタディーログの活用による学習効果
- ・ 学びのスキル向上

四 自学マネジメント力の向上

- ・ 「問い」の連続的展開(学校と家庭)
- ・ 探究心を持ち研鑽する教師

五 共創型実践研究ユニットとしての主体的な学び合い

- ・ 教育の質の向上と新たな価値の創造への挑戦

三 自律型学習者の育成に向けた学びの転換

(一) 授業と家庭学習のシームレス化

現代社会では、自ら学び続ける力を持つ自律型人材の育成が求められており、児童の学びが学校内に限定せず、生活全体に広げる視点が重要である。従来の家庭学習は宿題中心で、児童の主体性や創造性を十分に育むものではなかった。今後は、児童が自ら学習内容や方法を選び、探究する「自学(うち学)」への転換が必要である。授

業で生まれた問いを家庭でも継続的に探究できるようにすることで、児童は学びを自分事として捉え、深く継続的に学ぶ姿勢が育まれる。

本校では、「星峯西自学メソッド」の構築を通して、授業と家庭学習のシームレス化を図り、自律的な学びを支える仕組みづくりに取り組んでいる。

(二) 実践の工夫と支援体制

児童の発達の段階に応じた「自学」の進め方に改善を加えている。低学年では習慣化、中学年では問いの活用、高学年では自己選択による探究を重視している。ICTを活用し、学びの記録・共有・振り返りを支援するとともに、教師・保護者との連携を通じて、継続的な学習支援体制を整えている。

四 共創型実践研究ユニット

教師の学び合いを促進するため、「学級づくり」「教科教育」「道徳教育」の三ユニットを編成し、共創型の探究を進めている。いずれのユニットも、授業づくりや児童への対応を「児童の姿」から検討することを目的としており、児童理解を基盤とした実践的な協働研究が展開されている。

五 おわりに

児童の発達の段階に応じた自学の体系化により、学習習慣の定着、主体的・探究的な学びの促進が見られた。また、ICTの活用は、児童の学びの可視化や学習履歴の蓄積に効果を発揮し、学びの質の向上にも寄与している。今後は、児童が自らの学びを設計・発信できる環境づくりを更に進めていきたい。



非認知能力の向上を目指して

東谷山中(市) 窪田 智 司

一 はじめに

本校は、昭和五十五年二月に谷山中学校から分離し、生徒数八百十八人、教職員数三十八人で始まった学校である。

本校区は、旧谷山市街地東部の住宅地及び新興団地魚見ヶ原を中心に、武迫団地、希望ヶ丘団地、さらに、商業地・工業団地を形成している東開町からなる。学校は、桜島が眺望できる魚見ヶ原団地の東部に位置している。学校の周辺は、昭和四十年代前半までは山林や原野の広がる自然豊かな地域で、丘の東端から錦江湾を眼下に見下ろすことができる。錦江湾の沿岸漁業が盛んな頃には、魚群を見張る最適な場所であったことから、「魚見ヶ原」の地名が付いたと伝えられている。現在の生徒数は、八百九十四人、学級数は三十三学級であり、今年度創立四十六周年を迎える。

二 学校経営方針

校訓は「考える人（英知）心豊かな人（情操）たくましい人（健康）」である。
学校教育目標は「共に学び、共に伸びる、互いを認め合う生徒の育成」である。

三 本校の取組

- 校訓や教育目標達成のために、人権教育の精神を基盤とした「温もりのある学級・学年・学校づくり」を推進している。また、生徒の基本的人権に十分配慮し、一人一人を大切にしたい教育を行うために次の四点を大切に学校経営に努めている。
- (一) 生徒に対するいかなる差別もしない。
 - (二) 生徒にとつて最もよいことを第一に考える。
 - (三) 生徒の命や生存、発達が保証される。
 - (四) 生徒は自由に自分の意見を表明する権利をもっている。
- (一) 生徒会が主体となった学校行事
合唱コンクール・体育大会・文化祭等の行事を通して、生徒会で生徒の興味・関心を引き出す環境を作ることによって、「参加意識の育成」「積極的な態度」が多く見られるようになってきた。自分自身の興味・関心に気付き、目の前の問いを考える思考や周囲との対話のプロセスを介し、非認知能力の向上につながっている。

(二) 部活動キャプテン会

どこの学校でも行われているキャプテン会であるが、本校では、チェックシート項目を十七項目設定し、その中に「各部活動の目標を部員が言えますか」「同級生同士、先輩や後輩との関係は良好ですか」「登下校時に校外（地域の方）への挨拶はできていますか」「大会会場でのマナーを守り積極的に準備や片付けをしていますか」「学級で活躍していますか」等、非認知能力向上に関わる項目も設定している。毎月キャプテン会前の反省とキャプテン会後の振り返りで、成功や失敗を経験し、学びを深める中で非認知能力の育成を行っている。

(三) 実践五項目

きまりを守る・授業に集中・作業を精一杯・明るいあいさつ・整理整頓この五項目を全職員で共通理解し、指導改善を図りながら非認知能力の効果的な育成を目指して取り組んでいる。年二回自己評価を実施しているが、今年度は、生徒会生活部が自己評価の結果をもとに、具体的な手立てを考えさせるような取組も進めていきたい。

四 おわりに

非認知能力を伸ばすには、失敗したことを責め、成功することだけに着目してしまうと、子供たちの自由な発想による学びや失敗から得られる経験がなくなってしまう。子供たちが自由な発想に基づき、成功や失敗を経験し、学びを深める過程の中で非認知能力の育成が行われていく。子供が成功したら褒め、失敗しても責めない。そんな環境を全職員で目指していきたい。



児童が笑顔で過ごせるために

荃南小(熊) 星野 一彦

一 はじめに

本校は、南種子町の南東部の荃永地区に位置している。荃永地区は、世界一美しいロケツト射場の種子島宇宙センターや国と県の指定文化財を有し、東に太平洋を望む風光明媚な地域である。また、古くから水田が広がり、超早場米の産地でもある。昨年度は、学校近くの遺跡発掘調査で、種子島の稲作の歴史を紐解く成果があり、まさに、稲作抜きには語れない地域でもある。

このような豊かな地域資源に恵まれた中、創立百五十二周年を迎えた本校(通常学級三学級・特別支援学級二学級)では、二十六人の児童が、元気に生活している。

二 取組の実際

学校教育目標「心豊かで、たくましく、笑顔いっぱいの子供を育成する」を達成するため、島立ちを見据えた学力の向上・定着を中心に、特色と活力ある学校づくりに努めている。ここでは、一人学年の解消などに繋がっている宇宙留学制度と地域の中で受け継がれている文化財との関わりについて紹介する。

(一) 南種子町宇宙留学制度の充実

平成八年度の制度開始から本年度三十周年を迎えた歴史のある留学制度である。この制度は、南種子町の豊かな自然の中

で様々な体験活動を通して、心身共に健康な児童生徒の育成を図るとともに人口減少する地区において、学校や地域に活力をつくり、地域のともしびを消すことのない持続可能な社会の実現を目指すことを目的にしている。

本校は、第一期の宇宙留学学生から受け入れている。町が委嘱する里親のもとで留学を行う里親留学は、これまで地区の多くの方々に支えられてきている。平成二十九年度からは、町内の住宅に家族で転居し、留学を行う家族留学、町内の親戚のもとで留学を行う親戚留学も導入された。宇宙留学は、地元の児童と留学している児童が切磋琢磨する中で、学力はもろんのこと、豊かな人間性を醸成している。そして、児童自身が、自分を高めるために学ぶ、自分の弱い心に負けない、勇気をもつことにも繋がっている。これまでも、そしてこれからも地区の方々とともに、宇宙留学制度の充実に努めていきたい。

(二) 郷土愛を育む地域の文化財の活用

本校区は米どころであり、その中で稲作のルーツとも言われ、古代から営まれてきた赤米に関する文化財がある。国指定重要無形民俗文化財「種子島宝満神社の御田植

祭」と、県指定有形文化財(建造物)「宝満神社本殿」である。双方とも赤米の神事を通して、地域の稲作文化と深く関わってきた歴史がある。

宝満神社の創建年代は不詳であるが、関係史料から玉依姫を祭神とした社である。御田植祭は毎年四月三日、その年の豊作を祈願する農耕行事である。保存会の男性の方々とともに、上学年の男子児童が参加し、田植歌と太鼓に合わせて赤米の田植えを行う。宝満神社の御田植祭は、田植えを行う神田に隣接した御田の森と呼ばれる小高い山で、神事を執り行うのが特徴である。

さらに、町では児童が赤米文化への見聞や交流を通して、赤米のことを深く知り、次世代へ継承するための環境を整えている。岡山県総社市と長崎県対馬市の学校とは、毎年、高学年の児童が開催地を訪問し、地域を越えた交流活動を行っている。赤米文化の継承は、本町を含めた全国でも三か所のみ残され、懸命にバトンを繋いでいる。

地区に残る行事などは、日々の暮らしに根ざした身近な文化財であるため、歴史的、文化的な価値には、なかなか気付きにくい。それゆえに、個性豊かな行事などが、時代とともにたとえ形をかえようとも、いつまでも私たちの心の財となるよう、児童には語り続けていきたい。

三 おわりに

本地区をはじめ町全体には、教育を大事にする風土があり、行事を通して地域という大きな庭で、子供を育てる教育力も残っている。様々な分野で活躍されている人材も豊富である。だからこそ、恵まれた地域資源を十分に活用した教育活動を推進できるよう、これからも全身全霊をかけて打ち込みたい。



地域と共にある学校

永原小(始伊) 小川 正 嗣

一 はじめに

本校は、始良市加治木町の中心部から北西部の高台に位置する創立百四十七年の学校である。児童数は減少傾向にあり、平成十六年度から始良市小規模校入学特別認可校制度を導入している。現在、児童数は二十八人で、うち十三人が特認校制度を利用している児童である。

地域は学校への思い入れが強く、運動会やバザーなど、学校行事やPTA行事への協力に積極的である。また、コミュニティ協議会主催の催しは、必ず本校が会場として行われ、卒業した特認校生やその保護者も地域住民として参加するなど、学校を核としたネットワークができあがっている。

本校は「ふるさとを愛し、自ら学ぶ、心豊かでたくましい永原っ子の育成」を学校教育目標とし、目指す学校像に「学校・家庭・地域の協働」を掲げる「地域と共にある学校」である。

二 本校の取組

本校のような地域に根差した学校が、子供が輝く教育を充実させるためには、学校内外

からのバランスのとれた取組が大切である。しかしながら本校は、市街地からさほど離れていないため、自然を生かした教育活動の充実が難しい。そこで、校内では「子供主体の楽しい授業づくり」、校外では「伝統文化の継承」「人との繋がりを柱として、地域と協働で子供が輝く場所づくりに努めている。

三 取組の実際

(一) 子供主体の楽しい授業づくり

ア 教師の長所を生かした楽しい授業
自分の授業でどうした時に子供が一番輝くかを分析させ、それを生かした一人一提供授業を行っている。子供が輝く技術の学びとなるため、自然と楽しい授業が構築され、学校評価による子供の満足度も高くなっている。

イ 疑問形で展開する説明と称賛

子供の目の輝きが消えるのは、暇な時やつまらない時等である。本校では、一方的な説明で子供の意欲が低下しないように、説明の際には、必ず思考を促す発問と称賛をセットで取り入れ、説明中の子供のつぶやきを積極的に称賛している

ため、子供の学習意欲が高くなっている。伝統文化の継承と人との繋がりを

ア 「吉左右踊り・太鼓踊り」の継承

本校が位置する加治木町西別府地区に伝承する県無形民俗文化財の「吉左右踊り・太鼓踊り」の継承活動に取り組んでいる。地域の保存会員と一緒に踊りを学び、練習を重ね、運動会で大人と一緒に踊りを披露している。たくさんの拍手に包まれることで、満足感や充足感を味わうとともに、自分が伝統を繋いでいるという誇りを感じている。

イ 卒業しても一員

本校で学んだ子供たちは、特認校生であっても、本校区に住んでいる者として卒業後も学校や地域と繋がっており、活躍の場が用意されている。例えば、運動会への役員・選手としての参加やふるさと学寮への補助係としての参加である。生き生き活動する姿を見ることができ

四 おわりに

学校教育が変化する中においても変わることなく続いてきた本校の地域協働型教育は、「子供が主役」を一貫している点において学ばべきことが多い反面、保護者への負担が大きき時代にそぐわない面も見られ、持続が難しくなってきた。今後地域と共にある学校として、学校内外の教育をバランスよく推進するために、学校運営協議会を充実させ、時代に即した学校教育を展開していきたい。

心に残るひとこと



「一視同仁」に立った学校経営

西陵小(市) 小出水 明 洋

私は、始良市教育委員会に三年、その後、始良市内の小学校の教頭を三年、計六年間、始良市の教育に携わった。その頃の各種研修会で、始良市の教育長の講話を聞くことが毎回来しみであった。人生哲学や服務指導、教育の動向、人事異動の考え方等、多種多様な話を聞くことができた。

市教頭研修会の時に、教育長から「一視同仁」に立った学校経営の話があった。「一視同仁」とは、全ての者を差別なく平等に愛すること、学校現場においては、児童に関心をもって、児童理解に努めることが大切になる。児童理解と

同様に、教頭は教職員の理解に努めることが肝要であると話された。

児童を理解するために、私は児童と話すことを大切に、毎日多くの子供たちと会話を交わした。補教にも可能な限り入り、授業を行った。児童理解がうまく進んだ結果、保護者理解も進み、学校経営で課題になっていたことが改善されている手応えを感じられるようになった。特に、生徒指導上の課題が早期に解決できることが増え、学校経営や学級経営、教科経営にもいい影響があった。

教職員の理解は、各種スポーツ大会と一緒に出場することや、地域行事への参加を促すこと等をとおして、日常会話がしやすい職員室にすることができた。その結果、教職員が日頃考えていることや価値観、人間関係での悩み等、話ができる環境になった。ただし、全ての教職員と信頼関係を構築できなかったことが課題であった。

この「一視同仁」に立った学校経営を目指したことで、教頭として、児童や保護者、地域住民、教職員等の対人技術を高めることができた。信頼できる学校づくりにも貢献できたと思っている。

今後も、教頭時代に培うことができた「一視同仁」の視点を常に意識しながら、学校経営を進めたい。

関係が悪くなったら

うまくいかなくなる

東出水小(北) 横 濱 郁 代

「私も納得がいかにないことに対して、職員に話をしてきた。でも、お互い感情的になって引き下がり、かえってそれが尾を引いて、他のこともうまくいかなくなってしまい後悔している。だから教頭さん、ここはぐっとこらえん。今日は、気分転換に、先生たちと飲みにも行って来んせ。」

これは、私が教頭一校目一年目のある日の教室訪問で納得のいかないことがあり、その思いを校長先生に伝えた時にいただいた助言です。私は、明らかにこちらが正論で、百歩譲っても〇〇は改めてほしい旨を校長先生に繰り返し伝えました。校長先生は十分に聴いてくださり、

「大丈夫。伝える気持ちがあれば、必ずタイミングよく伝えることができるから。」で、おしまいでした。私は諦めて、その日は職員数人と飲み会を楽しみました。

それから二十一年が経とうとしています。その間、自分で言うのも何ですが、自身の考えや思いを伝えるときには、相手に十分な思いを巡らすようになりました。そして何より、困り事や事案が生じたときには、関係職員と熟議し、双方が合意できるであろう落としどころを定めてから、話合いや対応に臨むようになりました。落としどころに着地することを唯一目標として、それ以外のことは受け入れ、許すことも我慢することもできるようになりました。それができるのも、二十一年前の校長先生にいただいた「関係が悪くなったら うまくいかなかった」という言葉と、その言葉がつないでくれたたくさんさんの素敵な仲間たちのおかげです。

「校長先生、聴いてください。」と訴えていた自分の未熟さや熱さを懐かしむとともに、きつと空の上から「教頭さん、よくやってる。」と見守ってくださっているだろうと思っていますが、どうでしょう。

教師は、行きずりの旅人にあらず

茶花小(大) 山 本 裕 三

校長室に飾られた額のひとつに、次の言葉が示されている。

「教師は、行きずりの旅人にあらず」

ここ観光地と論で勤務する我々教職員にとつては、厳しい響きすら感じる言葉である。この言葉は、十島村に勤務されたある校長先生の言葉であるとされ、それを本校二十三代校長山の江友雄先生が、校長室にしたためたものであると説明してある。意味は、「地域にしっかりと根を下ろし、子どもの教育に当たりたいとする強い熱意や思い」であり、その思いを歴代校長が引き継いでいるとされている。

私が初めてこの言葉を知ったのは、今から十八年前、教諭として本校に赴任した時であった。当時の私の解釈は、「観光地だからって、旅行気分教育に当たるなよ」という認識だった。それから十年以上経ち、今年度管理職として本校に赴任し、あの時とは違う思いを持ってこの言葉を受け止めている。

「与論に赴任した職員は、与論の生活に苦し

んではないだろうか。」本島出身であるがゆえに、つい考えてしまっているのである。与論はかつて、観光に沸く全国でも有数の活気溢れる島であった。当時は、与論勤務を希望する教職員が多かったとも聞いているが、果たして今はどうだろう。「旅人」は好んで与論を訪れた人、教師は命ぜられて着任した人なのである。教師として、この地のために頑張ろうとする前向きな姿勢があるならよいのだが、昨今、離島、へき地へ異動したがゆえに、その地の生活になじめず苦しんでいる教員を目にすることが多い。本音では、しっかりとやりたいこともなるし、地域の思いも受け止めてほしいと思うのだが、難しいのが現状である。離島を多く抱える本県にとつては、避けて通れない課題である。離島、へき地教育に希望を持ち、やりがいを感じ、積極果敢に取り組んでいく教師の姿を求めたいし、またそれは、県費負担職員として、当然の姿だろうとも考えるのだが。

校長として、「教師としての旅人」の苦労や悩みには共感し寄り添いながらも、私自身が、「行きずりの旅人」にならないように、島の教育のために取り組んでいきたい。

原典にあたる

三島片泊学園(郡) 仲谷 卓

再配として赴任した学校は、児童百名ほどの小規模校であり、若手の教職員の姿は見られなかった。授業力を高めたい一心で、私は研究授業を積極的に引き受けていた。ただし、「自分の授業なのだから、自分のやり方でやらせてもらいたい。」という独りよがりな思いが先行していたのも事実である。

ある時、研究教科ではなかった算数で、三年生「あまりのあるわり算」の研究授業を行うことになった。結果はどうだったか。想像のとおり、大きな失敗に終わった。導入段階から児童の反応は予想と異なり、授業の展開も思うように進まなかった。放課後の授業研究では、質問や意見が次々と寄せられ、私は明確な応答もできず、自らの不甲斐なさに、ただ落胆するばかりだった。

そして、迎えた指導助言の時間。すでに心身ともに疲弊していたが、「授業の何がまずかったのか。」「どこをどうすればよかったのか。」を知りたくて、一筋の光を求めるような思いで、その言葉を待った。

当時の学校教育課長(現在は県内で教育長を務めておられる)は、数学が専門と伺っていた。課長は自ら黒板に向かい、導入における学習課題の提示から学習問題への焦点化までの流れや、展開における数学的活動の具体例などを、熱を込めて語りながら示してくださった。その確な指導に、私は深く感銘を受けた。そして最後にいただいた言葉が、今も心に残っている。「原典にあたるのが大切である。」

この「原典」とは、学習指導要領をはじめ、わり算に関する先行研究や実践記録、他社の教科書などを指すのだらう。以来、この言葉は授業における教材研究や指導案作成のみならず、時には原点とも読み替え、教育に関わるあらゆる業務において、私の支えとなっている。

教育の営みは、日々の実践を積み重ねるだけでなく、迷いや課題に直面したときこそ、原典(原点)に立ち返り、教育の本質を問い直す営みでもある。原典は知の源泉、原点は志の出発点。両者に立ち返ることで、教育の道はぶれずに進める。学習指導要領や先行研究、教育法規や制度の背景にある理念、そこに立ち返ることで、判断に確信が生まれ、方向性が定まる。あの日の一言は、今も私の背中を静かに押し続けている。

ある日の校長講話



「やさしさ」を育てよう

蔵島小(北) 盛 永 宏 治

みなさんは、友達や周りの人に優しくされて嬉しかったことはありませんか。逆に、あなたが誰かに優しくしてあげたことはありませんか。きつとどちらもあることでしょう。人の「やさしさ」に出会くと、心がふわっと温かくなりますね。

さて、ここでみなさんに、歴史小説家の司馬遼太郎さんという方が『二十一世紀に生きる君たちへ』という本の中で書いた、子供たちに向けたメッセージを紹介します。それは、「私たちは、やさしさなどの気持ちを訓練して育てていかなければならない」というものです。

人間は一人では生きていけないから、家族や友達と助け合っていくために、人をいたわる気持ちや他人の痛みを感じる力、やさしさを、訓練して自分の中に育てていくことが大切だと、司馬さんは言っています。

それでは、どんな訓練をすれば「やさしさ」が身に付くのか、みなさんは疑問に思いませんか。司馬さんによると、例えば、休み時間に校庭で遊んでいるときに、目の前で友達が転んでしまったとします。そんなときに、「ああ痛かったろうな」と思う気持ちで、「やさしさ」を育てる訓練になるのだそうです。

司馬さんのこのお話を聞いて、みなさんはどう思いますか。できそうですよ。そして、蕨島小のみんなは、普段からそんな気持ちをもつことができていると、私は思います。一輪車で転んで泣いている友達に、「大丈夫。」と、優しく声を掛ける様子、転入生のお友達が困っているときに、そっと教えてあげる姿など、今までみんなの「やさしさ」をたくさん見てきました。そのたびに、私は心が温かくなりました。

これからも、みんなの心の中の「やさしさ」を、もつともっと大きく育ててほしいなと思います。そして、みんなで仲よく安心して過ごせる蕨島小を、つくっていきましょう。

「聴き上手・話し上手」に

横川小(始伊) 有 留 雄 一 郎

みなさん、おはようございます。夏休みをどのように過ごしていますか。元気ですか。

鹿兒島県は八月を、人権同和問題啓発月間としています。

学校は、自分一人だけではありません。いろんな友達がいて、いろんな先生がいる。みなそれぞれ違います。ときにはけんかもあるでしょう。だから、分かれ合うことがとても大切です。そのために、「聴き上手・話し上手」が必要となってきます。

きくは、漢字では「聞く」ではなく、「聴く」の方。「聴」の漢字には何かが隠れています。そうです。この漢字には「耳」だけでなく、「目」や「心」という字が入っていますね。相手の顔を見て、心から聴く姿勢をもって、話をよく聴いてあげること。つまり、「聴き上手」になることです。そして、次は「話し上手」です。自分のこともしっかり伝える。とことん話し合うと、「分かり合える」だけではなく、自分と相手とは違うのだ」ということに気付きます。相手が伝えたいことを伝えたいとおりにこちらが

受け取る。こちらが伝えたいことが伝えたいとおりに相手に伝わる。これらを成し得た時に初めて、コミュニケーションがしっかりできたと言えます。

違う人同士がうまくやっていくには、我慢や譲り合いも必要となります。それが仲間というものです。

もし、自分自身が勉強のこと、お友達のことや家族のことで悩むことがあったら、思い切って「話し上手」になって、その悩みを友達や先生、お家の方や周りの人に相談してみてください。

みんなの周りには、「聴き上手」の仲間がたくさんいますから、きっと大丈夫です。

八月もあとわずかです。九月一日にみんなが笑顔で登校してくれることを、心から待っています。



夢に挑戦

末吉中(隅) 中原 誠

おはようございます。先ほど吉井淳二記念大賞の表彰を行いました。が、実際、先生も作品を見て、どれも素晴らしい、その生徒しか描けない作品で、子どものもつ感性や才能は凄いなと、改めて思いました。先日は「夢に挑戦」というテーマで、鹿児島実業高校出身の元プロサッカー選手、Jリーグで活躍した前園真聖選手のトークセッションがありました。前園選手は、四つ上の兄の影響でサッカーを始めたそうです。土日はいつもスポーツ店に行き、海外のプロサッカーの試合やビデオを、ずっと見ていたそうです。上手い選手の技術を真似し、誰にも負けないドリブルの練習を繰り返し、小学校六年の卒業文集には、将来はプロサッカー選手になると、書いたそうです。当時は今のJリーグはありませんから、海外のプロサッカー選手になることを目指していたと思います。そして、次のようなことを話されました。「スポーツでも習い事でも、まずは自分がそのことが好きであることが何より大事。そして楽しんでほしい。楽しむことで、夢中になれば、更にいい」と。

次に、「上手くなるためには、とにかく自分で考え、研究・工夫をして、練習も手を抜かない。チーム練習は当たり前、それ以外の自主練習がいかに大事であるか。人の二倍も三倍も練習をする。本当に好きなら練習を苦にせず、夢中になれば、絶対に投げ出さない。また、試合に使われないときや試練や壁、挫折が必ず来る。その時、自分が腐り、人のせいにして、文句を言っているうちは、絶対に成長しない。人を責めず、自分には何が足りないのか、冷静に自分自身を振り返ることで、気付くと課題発見につながる」さらに、「苦しいときに支え、寄り添ってくれる人が本当の友達である」と、話されました。皆さんも今、部活や習い事などしていると思います。中学生の時期は、鍛えれば鍛えるほど伸びる時期です。人はその人しか持ち得ない、素晴らしい光る何かを持っています。その光る資質・能力を更に伸ばすかどうかは、自分次第です。様々な出会いや影響で、夢中になれるものを見つけてほしいと思い、(全校朝会で)話をしました。

話のひろば



好きなことを

一生懸命に

馬根小(大)

畑 隆 宏

平成二十四年度から六年間、鹿児島市立大龍小学校で音楽専科をしていた。音楽を通して私にとつては大きな出来事があった。

いくつもあった。

一 吹奏楽コンクール等で、沖縄県以外の九州各県にある素晴らしい会場で指揮を振れたこと。

二 マーチングフェスティバルで、エンディングの千人の大合奏で指揮を振れたこと。

三 かごしまアジア青少年芸術祭で、世界の方々と一緒に演奏ができたことやエンディングで、大龍小金管バンドの演奏に合わせて、海外の方々が「世界に一つだけの花」を合唱してくれたこと。

四 人権同和教育の全国大会で、蓮池透さんと市川健一さんの講演後に、心を込めて演奏できたこと。

五 おはら祭で、歩行者天国となる大通りを気持ちよく演奏してパレードできたこと。

六 鹿児島市役所前にあるみなと大通り公園のクリスマス・イルミネーション点灯式で、光り輝くイルミネーションの中、クリスマスソングを演奏したこと。

七 バンド活動の様子が、全国誌である「教育音楽」に掲載されたこと。

八 ノーベル物理学賞を受賞された赤崎勇先生の前で演奏できたことや、自分たちのバンド演奏に合わせて赤崎先生が歌ってくださったこと。

やはり自分にとって一番の大きな出来事は、赤崎勇先生との出会いだった。赤崎先生の前で演奏したことが二回ある。最初は、大龍小百三十周年記念式典において、演奏したことだ。大龍小の卒業生である赤崎先生に式典の中で「講演いただくという内容で、今思うとよく引き受けてくださったなあ」とびっくりする。その日の夜の懇親会で直接赤崎御夫妻と話をする機会をいただいた。赤崎先生が、

「今日の演奏は感動しました。一生懸命な姿っていいですね。私も小さいときは、ずっと石を

拾っていました。好きなことを一生懸命させてくださいなね。」

というお話を直接された。

二回目の演奏機会は、何と赤崎先生からの依頼だった。市民栄誉賞の授賞式を開催するにあたり、是非会場に大龍小の子供たちを呼んでほしいということだった。その日に演奏したのは、「大龍小校歌」、「故郷」の二曲だった。赤崎先生は、卒業当時を思い出すかのように、演奏に合わせて口ずさんでいらつしやつた。校歌の歌詞も覚えていらつしやつたようだ。

教職を歩む中で、赤崎先生からいただいた「好きなことを一生懸命に」という言葉は、私の宝物である。



言葉の力

大口中央中(始伊)

小倉伸幸

本市では毎月、関係機関や民生委員の方々と一緒にあいさつ運動が行われている。ある日のこと、

登校中の生徒から笑顔で元気あふれる「おはようございます」というあいさつを受けた。途端に気持ちがパツと明るくなり、素晴らしい一日の始まりを予感した。あいさつという「言葉の力」を改めて実感した瞬間であった。

以前、ある放送局が「日本の美しい言葉」についてアンケートを行ったところ、第一位が「ありがとう」、第二位が「さようなら」、以下五位までが「はい」「すみません」「おはようございます」という言葉だったそうである。私たちが日常生活で、幼いときから自然に使っている言葉である。そのような美しい言葉は、人と人をつなぎ、お互いの心と心を通い合わせ、楽しく、住みやすい家庭や学校、社会を作り出すための一番身近な手段なのだと言われている。

先日、教育関係の仕事をしている娘との電話やメールで、「キモイ」「ウザい」などという美しい言葉とはかけ離れたような言葉を見聞きすることがあった。注意しても本人は、さほど悪気もなく、普通のあいさつ程度に使っているようであった。電話とは違い、ネットでの文字で

のやりとりは、周りの人を知らず知らずのうちに傷付けている言葉（表現）であること、同時に、発した本人にも返ってくる言葉であり、自分自身の心を乱れさせるものだと言えた。そして、そのような言葉が日常頻繁に使われていたとしたら、その人を取り巻く環境は、殺伐としたものになっていくことを夜遅くまで語った。

以前仕えた校長先生の、「私たちの心に大きな影響を及ぼす『言葉』。また、物事を考えたり、表現したり、判断したりする上でも大事となる『言葉』。言葉は、人の感性や感情の基盤であり、その人の発する言葉のひとつで、人柄や人間性が見えてきたりもします。私たちは、受ける言葉によって大きく影響を受け、反対に自分の発する言葉で周りの人の気持ちに大きく影響を与えているということを改めて自覚して生活していく必要があるのではないかと思います。」との校長室だよりを、娘と今一度読み直すことであった。

子供たちが多くの時間を過ごす学校、そして生活の基盤となる家庭、それぞれが「言葉の力」をしつかり自覚し、未来を担う子供たちに、正しい言葉、美しい言葉、そして思いやりの言葉が身に付くよう取り組んでいきたい。

寄り添うということ

古仁屋高

宮原 正博

初任校は、いわゆる「荒れた」高校だった。生徒数は三百人足らず。年間二十人ほどが退学し、喫煙や暴力は日常茶飯事。家庭環境に恵まれない生徒も多かった。

私は当初、「高校だけが全てではない、やる気になれば辞めてもいい。」と、どこか突き放した気持ちでいた。

そんな時、同じ年の同僚Aが、一人の生徒Bの退学を必死に止めようとしていた。Aは愛想がいいわけでも他人に媚びるタイプでもない。ただひたすらBと向き合い、何度も生徒指導主任やベテラン教員のもとに足を運んでは頭を下げていた。

先輩から「もう十分やった。」と言われても、「まだ指導の余地はある。チャンスを与えてほしい。」と粘り続けた。私たち若手教員も毎日のように語り合った。「Bの行動は辞めたいという意思表示ではないのか。」という者もいたが、Aは諦めなかった。

しかし、Aの思いとは裏腹にBは問題行動を繰り返した。やがて、学級の生徒たちからも「なぜBばかり庇うのか。」と抗議が出るようになった。それでもAは多くを語らず、Bにも、学

級の生徒たちにも、ただ「ちゃんとしろ。」と言いつづけた。やがて、Bはなんとか卒業にこぎつけた。感謝の言葉ひとつない、Bらしい巣立ちだった。

その夏、BがふらりとAを訪ねてきた。初めてのボーナスで買ったというネクタイを手渡し、相変わらず無愛想に帰っていった。

その姿を見て、私はそれまでの自分を恥じた。Aの背中に教育の本質を見た気がした。生徒の背景には私たちの想像を超える現実がある。だからこそ、その現実に見切りをつけてはいけないのだと、Aの姿が教えてくれた。あのネクタイは、Aの揺るがぬ信念と、Bの不器用な「ありがとう」の気持ちが形になったものだった。

それ以降、私の生徒への向き合い方は変わった。「生徒に何ができるか」、「どこまで寄り添えるか」、その答えは一つではない。だが、仲間と共に「関わり続けること」こそ、教師の第一歩なのだと今は確信している。

とはいえ、現在の学校現場には、三十年前とはまた異なる教育課題が山積している。悩みながら教壇に立つ若い教員もきつと少なくなだらう。それでも私は伝えたい。「生徒の心の奥にある思いにそっと寄り添ってほしい。その気持ちはいつかきつと届くはずだから」と。

読書案内



■ 渡辺和子 著

面倒だから、しよう

上市来小(目) 中能 健 尚

渡辺和子ワールドに包まれた名著。「置かれた場所で咲きなさい」に続く人生訓。一部、内容の重複はあるが、二部作として通して読むとよい。

マザー・テレサが来日されたときに、いわれたことが書かれてある。

「私が一番びっくりしたのは、日本のきれいさだ。街路、服装、自動車、何もかもきれい。しかし、もし、あのきれいな建物、家屋の中で親子の間の笑顔、夫婦間の思いやりがないとしたら、インドの貧しいながら、ぬくもりのある

家族の方が幸せだ、と思う。」

つまり、「きれい」は、お金を必要とするが、大切なのは、「美しさ」であり、美しさに必要なのは、心の輝きだということである。

今のように、手間ひまをかけないですむものが溢れている時こそ、自分の心の中の小さな闘いが必要であり、その結果として、初めて本当の美しさ、自分らしさが生まれてくるのだということだ。確かに、仕事をしていると、面倒な仕事と楽な仕事が見えてくる。やらなければいけないと思いつつも、面倒なことは気が乗らないし、自分がしなくてもいいのではないかと思うようになると、さらに気が滅入ってしまう。そんな弱い心に真つ向から立ち向かうのが「面倒だから、しよう」という一冊である。

「目の前に楽な道と苦しい道があつて選ぶときに、苦しい道を選んだほうが人生の糧となる」という言葉を聞いたことがある。苦難に直面したときこそ自分を飛躍させるチャンスであり、苦難に立ち向かうべきという考えだ。「美しく生きること」それが人のため、ひいては自分のためになるということが著名人や有識者の言葉を交えながら分かりやすく書かれてあつた。

仕事においても基礎となる環境づくりや土台づくりは非常に面倒なことだ。しかし、基礎が固まっていなければその後の発展も見込めな

い。さらに成長させたいという思いがあるなら面倒に立ち向かう強い意志も必要であると感じた。

ちよつとがんばってみたくなる。そのような前向きな気持ちになれる一冊であつた。

幻冬舎 九百五十二円＋税

■ 立花 隆 著

脳を鍛える東大講義「人間の現在」

水之上小(隅) 花 里 弘 克

本書は、一九九六年にジャーナリストの立花氏が東京大学で行われた教養学部講義「人間の現在」をもとにした一冊である。

著者は、最新の宇宙論や生命論、脳科学などについて多岐にわたるテーマを横断的に扱うことで、現代人が直面する知的課題や生きる意味を考察している。また、膨大な読書と取材を基盤に難解なテーマを平易かつ論理的に整理して提示することで、学びを人生にどう生かすかを考える上で最適であると思う。

本書の特徴は、単なる知識の習得を目標にすることではなく、自ら考え、問い、選択する力を養うことにあると思う。各章では、最新の科学的知見や社会の課題を紹介しつつ、哲学的な視点や人間の在り方に関する深い問いが提示されている。これにより、読者は知識を受け取るだけでなく、自分の生活や社会と結びつけて思考する力、換言すれば、脳を鍛えることができると思う。

人生の指針としてのメッセージも強く含まれている。情報があふれる現代において、受け身で知識を得るだけでなく、自分自身の判断で行動し、価値観を磨く重要性を説いている。著者は、学ぶことの楽しさと同時に、生きる力を育む学びの姿勢を示しており、これからの人生を主体的に切り拓く力になると思う。

本書を閉じた時、読者は「私は何を大切に生きて生きているか」と自らに問いかけたくなるかもしれない。大学生だけでなく、教育者にとっても、自身の人生を見つめ直す大切なきっかけになると思う。

学びの意味を問い直す読書体験は、単に進路を考えるだけでなく、人生をどう歩むかを真剣に考える第一歩となる。そして、その問いは答えがすぐに出るものではなく、長い人生を通じて繰り返し向き合うものであろう。

私たちの未来を切り拓く力を与えてくれる立花氏の知的エネルギーを享受できると思う。

新潮社 千四十五円

■ 蛇蔵&海野風子 著

日本人の知らない日本語

樋脇中(北) 福元 耕二

三十年近くも前の話になるが、当時私が担任していた学級的女子生徒が質問した。

「先生、『ゲンシユク(厳肅)』ってどういう意味ですか。」

分らない言葉について生徒が教師に質問するというこの構図、一見、ごく普通の光景である。しかし、この場面は「普通」ではなかった。なぜなら、彼女が質問した相手は、ALTだったからである。質問を受けたALTはと言うと、これまた実に自然に、そして真摯な態度で質問に答えていた。

中学生とはいえ、日本人が、日本語の意味を外国人に聞く、という何とも奇妙な光景を目の当たりにした私は、一種の衝撃のような感覚に

襲われたことが今でも強く記憶に残っている。

本書は、日本語学校で教師をしている主人公が外国人に日本語を教えるとはどんな感じなのか、実際に起こった体験談を基に、日本語教育や異文化交流を取り上げたコミックエッセイである。日本語を学ぼうとする外国人が、日本語学校でどうやって学んでいくのかを垣間見ることができて大変興味深い。

きちんと日本語を学んだ外国人学生は「アルバイト先で日本人に教えてもらおう敬語が変だ。」と訴えてくることがあるという。いわゆる「バイト敬語」の問題である。一方、「教えていただけますか。」と「教えてくださいませませんか。」の違いを教えてください、などというハイレベルな質問をする学生もいるらしく、私たち日本人よりも日本語に精通していることに驚かされる場面も珍しくないようである。

ここ鹿児島においても、近年外国人労働者が増え、身近になってきていると実感することが多い。彼らが日本語の文字を読めるというのにはや当然のようで、日本人より日本語が堪能な外国人が今後もどんどん出てくることだろう。冒頭的女子生徒のように「外国人に日本語を教わる日本人」の姿が「奇妙」ではなくなる日も遠くないのかもしれない。

メディアファクトリー 八百八十円

趣味とは、自己の興味や関心に基づいて、楽しみや充実感を得るために没頭できる活動や関心事である。私にとって、それは城を歩くことにほかならない。休日や長期休暇には、歴史の息吹が残る城を訪ねる。幼少期より日本史、とりわけ戦国時代に興味を持ち、自然とその時代の象徴ともいえる城郭に、深い関心を寄せるようになった。全国に十二ある現存天守―江戸時代以前に建てられ、改修や修復を経ながら現代まで保存されている貴重な天守―のうち、特に国宝に指定された五城―姫路城、犬山城、松本城、彦根城、松江城―をすべて巡ることが、私のささやかな夢である。

趣味・文芸

城を巡る―私の趣味と教育の接点

鹿兒島玉龍 川上隆博

これまで、姫路城、犬山城、松本城を訪れたが、いずれもその威容と静謐な空気に圧倒された。弓なりに高く築かれた石垣、静寂の中に凛と立つ天守、城下町の名残―どれも唯一無二であり、それらは単なる観光資源ではなく、時代を超えて先人たちの知恵や哲学、当時の土木建築の最高技術を伝える「生きた教材」である。

城を歩くと、自然と時間の感覚が変わる。現代の喧騒から離れ、数百年前の空気に身を浸すことで、思考が深まり、感性が研ぎ澄まされ、タイムスリップした感覚になる。城は、単なる軍事施設ではなく、多層的な役割と象徴性を併せ持つ。防衛と戦略の拠点としての軍事的役割、領国支配の中核としての政治的・行政的役割、さらには、権威と美の体現としての象徴的・文化的役割など、築かれた時代によりその役割も

様々である。例えば、姫路城はその白漆喰の美しさから「白鷺城」とも呼ばれるが、実は迷路のような縄張り構造、武者隠し・武者走り・狭間などの防衛上の巧妙な仕掛け、戦略的立地など、戦国の叡智と軍略が息づいていることがわかる。城は、まさに、歴史の博物館である。

城の多面的な魅力に触れるたび、私は教育の営みに通じるものを感じる。城は「守る」「築く」「伝える」という三つの機能を体現している。これは、教育にも通じる。私たち教育者は、児童生徒の可能性を守り、安心安全な学びの場を築き、知と志を次世代へ伝える職責を負う。城

の構造が堅固な防御と優美さを両立させているように、教育もまた厳しさと優しさを併せ持つべきだと思う。

また、城は「変化と継承」の象徴でもある。戦乱の時代に築かれ、平和の時代に大切に保存され、現代においては文化財として再評価されている。その変遷は、教育のあり方にも通じる。時代の要請に応じて変化しながらも、根底にある理念や価値は継承されていく。教育もまた、いかに制度や方法が変わっても、「人を育てる」という本質は揺るがない。何百年という時を経てもなお悠然と構える石垣を見ると、教育の「不易と流行」が頭をよぎる。

城には構造的にも教育的示唆がある。例えば、天守は単なる権威の象徴ではなく、見張り台としての機能を持ち、周囲を俯瞰する視点を提供する。高みから領地を見晴らし、いかに民を導くかを熟考する為政者の姿を想像する。これは、校長が持つべき「俯瞰力」にも通じる。個々の事案に丁寧かつ迅速に対応し、一人一人の児童生徒や職員の状態を見つめながらも、学校全体をいかに動かすかを常に意識し、広い視野と高い視座から判断・決断することが求められる。さらに、城は城下町の名残など地域の記憶を宿しており、地域の象徴であり人々の誇りでもある。私が犬山城を訪れた

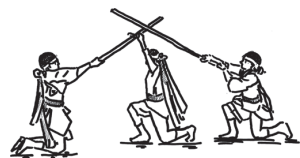
際、偶然電車の隣に居合わせた地元の方が、わざわざ城まで案内してくれたことがある。その姿に、地域の歴史や文化が人々の誇りとして息づいていることを、改めて認識させられた。教育は、教室の中だけで完結するものではない。地域の歴史や文化に触れることで、児童生徒は自らのアイデンティティを育み、他者との違いを尊重する態度を養うのだと思う。

まだ見ぬ彦根城と松江城を訪れる日は、いつになるのだろうか。今後も、城巡りを心ゆくまで楽しみつづ、学校経営者として、城のように堅牢にして柔軟な姿勢を保ち、時代の潮流にに応じて、本校教育のあるべき形を創造し続けたいと思う。

郷土の紹介

日当山の原風景

日当山中(始伊)
山崎省一



一 はじめに

本校は、昭和二十二年五月に開校した。現在三百三十七名の子供たちが在籍している。田園風景に新興住宅地が広がり、校区内の子にも変化がみられる一方で、大切に引き継がれている郷土のよさもある。

二 日当山温泉郷

校区内には、清流天降川が流れ、その兩岸には古くから日当山温泉郷として温泉地が点在している。そのひとつ、清姫温泉にある石碑には、湯本大権現・僧明源・永仁元年(一二九三年)との表記があり、今から七百三十九年以上前の鎌倉時代に、この場所に温泉が湧き出ていたことが伝えられている。



清姫温泉の石碑

日当山温泉旅館組合で作成しているパンフレットによれば、立ち寄りの湯はもとより、家族湯、宿泊者専用の温泉など、校区内には三十近い温泉地が点在している。私も、本校に赴任以来、週末には温泉地を巡っている。

そうした中で、気付かされるのは、ひとつのコミュニケーションの場になっているということ。コロナ禍を経て、黙浴なる言葉も出てきているが、地域では新参者の私が浴場に入っているが、誰彼なく「こんばんは」と声がかかったり、目であいさつを交わしたりして、見知らぬ者同士でも、何気遣うことなく、安心して湯船につかれる雰囲気がある。長年にわたり、世代を超えて、育まれてきた地域コミュニティのひとつだ。

三 ひなたやま夏祭り

八月上旬、日当山区の一大イベント「ひなたやま夏祭り」が開催される。開催の案内ポスターの原画を美術部の生徒が作成したり、会場の雰囲気づくりに吹奏楽部が出演したり、また、会場内の神輿担ぎを本校生徒の有志が担うなど、子供たちの活躍の場が用意された夏祭りとなっている。子供たちにとっては、毎年の光景だが、このことは、将来、地域を担っていく子供たちを育てていくことにも、繋がっていると感じている。



ポスター原画

四 大雨の影響

本年八月八日未明から明け方にかけて、霧島市に大雨特別警報が発令され、線状降水帯が発生した。本校の敷地内は膝上の高さまで冠水した。校舎や体育館、武道館等への浸水はなかったものの、体育倉庫、外トイレ、プールの中にはいくらかの土砂が入り込み、そ

の復旧作業に追われた。しかし、それ以上に天降川兩岸の温泉地の被害は甚大で、私も一時、復旧作業に関わった。かつての温泉宿や、長年商いを営んできた跡がみられる家屋の品々が、一夜にして粗大ゴミと化していくのを目の当たりにした。これまでこの場所で積み上げてきた歴史が、一瞬にして水に流されるという現実を突きつけられた時だった。

五 嘉例川駅

現在JR肥薩線は、八月八日の大雨の影響を受け、不通となっているが、校区内には、日当山駅・表木山駅・中福良駅・嘉例川駅などの各駅がある。中でも、嘉例川駅は明治三十六年開業、平成十八年には、駅舎が登録有形文化財となるなど、築百年以上の木造駅舎としてそのたたずまいを偲ばせている。

六 おわりに

子供たちにとって、郷土は心の原風景となる。そこでは、現在進行形で歴史が刻まれている。生まれ育ったこの地が、子供たちの成長を支えていけるように、学校・家庭・地域が連携した教育活動を推進していきたい。



嘉例川駅



8月8日の早朝 正門付近

ポジティブに物事を考え 楽しむことを増やそう！

プラス思考は充実感を得る。
陽気さは創造性を膨らます。
成功者はみんな楽しんでいる。



鉄砲伝来の地

© K.P.V.B

提供「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和七年十一月二十日付

薩摩川内市 藤田 芳昭 氏

○来る十二月十四日(日)は、県医師会館大ホールにて、教育講演会を開催します。現在定員には余裕があります。日本教育会会員の皆様の積極的な御参加はもちろん、一般の皆様様の御来場も広く歓迎いたします。多くの皆様様の御来場を心よりお待ちしております。

【校長協会事務局より】

○去る十月二十八日、県教育委員会に予算及び人事給与についての要望を伝える会を実施しました。本会は、会員の皆様からいただいた御意見等を直接県へ届ける貴重な機会となりました。御協力いただきました会員の皆様に心より感謝いたします。

○来年度の県大会につきましては、中学校が九州大会となるため、八月に全九州中学校長研究大会、十一月に県小学校長研究大会と別々に開催を予定しています。

正式な開催日は、近日中に御案内いたします。つきましては、次年度の教育課程編成の際に、校長先生御自身が参加できるように、学校行事等の調整をお願いいたします。

編集後記



立冬を迎え、暦の上では冬となりましたが、日中は汗ばむほどの陽気が続いております。校庭ではイチヨウが鮮やかに色づき、ウベ(ムベ)やザクロ、柿の木にたわわに実った実が、秋の深まりを感じさせてくれます。一方で、風に舞うクスノキの葉を子供たちがボランテア活動として清掃する姿も見られ、秋から冬への移ろいを全身で感じ取っているようです。二学期も後半に入り、子供たちは学校行事を通して、多くの学びを収穫しています。

さて、私事ではありますが、かつて社会教育施設に勤務していた経験から、九月に社会教育課より通知された青少年社会教育施設の今後の方針には深い感慨を覚えました。令和九年度末をもって青少年研修センターが廃止され、南薩少年自然の家、奄美少年自然の家には指定管理制度が導入されることでした。本校は、今後とも家庭や学校では得がたい貴重な共通体験の場として、その意義を大切にしていきたいと考えております。

令和八年度の教育課程編成に向けて、柔軟な教育課程の構築と年間総授業時数の確保を図りながら、自己肯定感(自尊心)や協働性、やる気、自己実現等の非認知能力の育成も重視していくよう、時間をかけてじっくり取り組む必要性を感じています。また、次期学習指導要領改訂に向けた議論が本格化し、教育を取り巻く環境は大きく変化しています。これらの変化した教育の現実に向けて、日々研鑽を重ねてまいります。

最後になりましたが、「鹿児島の教育」十一月月号をお届けします。校務御多用の折、玉稿をお寄せいただきました校長先生方に心から厚くお礼を申し上げます。今後とも原稿執筆依頼等への御協力を何卒よろしく願いたします。

中原 明美(宇宿小学校)